

巻頭言

国際教養学部長 照本 祥敬

国際教養学部は、学部発足から3年目を迎えました。完成年度である2011年度の折り返し点に立ったこととなります。

本書『教養教育研究20』は、全学共通教育ならびに学部専門教育にかかわる2009年度の学部としてのとりくみを、講演等の記録といくつかの委員会の活動記録として掲載しています。

まず、全学共通教育に直接・間接に関係する事柄としては、「助教」制度の整備を含む教員組織のあり方の検討、他学部のカリキュラム改革に伴う全学共通教育の位置や役割に関する検討、今後の初年次教育のあり方にもかかわる基礎ゼミ・教養テーマゼミの位置づけに関する検討などが、該当する委員会においておこなわれました。

上記以外で注目されるのは、これまで将来計画委員会内にあった教育部会が教育事業推進委員会として独立し、旧教育部会のとりくみを引き継ぐと同時に、学生向け講演会の企画・開催にみられるように学生への教育支援を意識した活動を追及した点です。本委員会は、今後、将来計画委員会や学部固有科目運営委員会と連携しつつ、また、全学のFD委員会やFD・SD名古屋コンソーシアムとも連携しつつ、教育活動全般の質的向上に重要な役割を果たすものと期待できます。

学部固有科目の運営に関しては、5言語間の履修者数のバランスや演習の選択方法の改善とともに、海外課題研究の充実、学部固有のキャリアガイダンスの開発といった課題についての検討がおこなわれました。今後さらに、年次進行に伴う卒業までの教育プログラムをどのように充実させていくのか、その具体化への着手が求められることとなります。

冒頭でもふれたように、今年度は、学部完成後のカリキュラム改革について、その基本的方向や内容を本格的に検討していくこととなります。全学共通教育に関しては将来計画委員会が、学部専門教育に関しては教育事業推進委員会が中心になって検討を進めていきますが、この作業を実りあるものにするためにも、委員会相互の連携と協働を強化していく必要を感じています。また、そうすることにより、より一層の学部教育の発展を創り出していきたいと切に願っています。

2010年4月